



子どもの発達を支えるための視点 "プライムPRIME" ～ 感覚運動あそびの活動を通して～

著者	榊原 久直
図書名	育ちゆくこども：療育指導事業（発達クリニック）の実践と研究 9
出版年月日	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1044/00002059/

Ⅱ. 子どもの発達を支えるための視点“プライムPRIME” ～感覚運動あそびの活動を通して～

榊原久直

(神戸松蔭女子学院大学)

第1章：“療育”とはどういう支援であるのか

1. 子どもの発達を支えるために大人に求められるものは何か

問いかけ：子どものこころとからだは成長していくために、私たち大人はいったいどのような関わりをしてあげることが大切だと思いますか？

子どもの健やかな成長に何が必要かと考えを巡らせると、いったいどのようなものが頭に浮かぶだろうか。これは100人に同じ問いかけをしたとしたら100通りの回答が得られる問いかもしれない。「愛情を注いであげること」と答える人もいれば、「栄養のある食べ物を与えてあげること」や「規則正しい生活を過ごさせてあげること」と答える人、なかには「健康なからだに生んであげること」と答える人もいるだろう。

多くの人が素朴にイメージしている通り、一人の子どもの健やかな成長には、その子が持って生まれた生物学的・遺伝的な要因が大きく影響している。遺伝子や染色体が私たちのからだを作る基本的な設計図の役割を担い、子どもの発達の土台を形作ってくれている。そして設計されたからだは成長していくためには、規則正しい睡眠がなされ、様々な栄養がバランスよく摂取されることや適度な運動などが不可欠である。

だが、そうした大枠だけを整えてあげていけば、「〇歳になったら～ができるようになる」といった具合に、子どもが自動的に成長していくてくれるかという、決してそういうわけではない。かつてある児童心理の臨床家が「一人の赤ん坊などというものはいない There is no such thing as an infant. (Winnicott, 訳書 1977)」と述べたように、子どもの周りには常に親を代表とする“大人の存在”がある。またそこに、きょうだいや友達、パートナーなども含めて考えると、子どもは一生を通して様々な他者との関係性の中で育つ存在であるといえる(鯨岡, 1999a)。そして子どもたちはこうした様々な他者との関係性の中で、様々な影響を受けつつ、また時に影響を与えながら育ちゆくのである。

悲しい例になってしまうが、虐待という関係性が子どものこころに深い傷を残すだけではなく、脳の発達に悪影響を残すことが明らかとなってきたということ(友田, 2011 など)は、今日多くの人が知ることとなっているであろう。例えば、ネグレクトを受けた子どもは、相手の表情から相手の感情を正確に読み取ることが非常に困難になるということや、身体的虐待を受けた子どもは、怒りの感情表出に対する反応に偏りを示すことなども明らかとなっている(Pollak et al., 2000)。こうした問

題は、子どもが本来得られるはずだったポジティブな経験が得られなかったというマイナスに加えて、この対人経験からくる負の影響が、次の、もしくは他の対人場面にも影響をもたらし、子どものその後の発達を阻害するという二重の意味での剥奪を生じさせるものであるといえる。

このように、子どもの発達には生物学的・遺伝的な要因だけでなく、他者との関係性の要因が強く影響していることや、知能的な発達(からだや知能の発達)と情緒的な発達(こころの発達)の相互作用が様々な研究の中で明らかになってきている。

2. 子どもの発達を支える親機能

問いかけ：子どものこころは生後何か月くらいの頃から存在していると思いますか？

では子どもの発達にとって良い関係性を提供するために、大人側にはいったいどういった関わりが必要となるのだろうか。この疑問に答えるべく、何十年にもわたる研究の中で、以下の4つの視点で親子のやりとりの質が調べられていた。①子どもの信号に対する感受性の高さ・低さ、②子どものしている行動への協調・干渉、③子どもの要求への受容・拒絶、④子どもにとっての接近可能性・無視。その中でも、乳児のシグナルへの“感受性 Sensitivity”が重要であるとされ、注目を集めてきた。感受性とは、子どもの信号を感知し、適切に解釈し、適切な行動を返し、即時に反応する傾向のことである(Ainsworth et al, 1978)。子どもにとっての身近な大人がこうした傾向を有して、幼い頃からやりとりを積み重ねていくことが、子どもの感情のコントロールや、他者の心の理解に関する力など、様々な力やこころとからだの発達をサポートすることが明らかになっている。

また、この感受性という大人側の要因は、さらに検討がなされ、敏感な大人側の関わりの特にどういった部分が子どもにとってより重要であるのかということが近年明らかになってきている。その具体的な例は、上述した問いに繋がるものである。

子どもにこころはいつからあるのかと尋ねられた時、これも回答は様々であろう。何か伝わった手ごたえがわずかながらに得られ始める生後3か月くらいだと答える人もいるだろう。生まれた時からあるはずだという人もいことだろう。近年の赤ちゃん研究が示している多くの知見を加味すると、お腹の中にいる頃から赤ちゃんは非常に多くのことを理解しており、キックゲームと呼ばれるような、お腹の中からお母さんとやりとり遊びが可能だという事実からも、胎児の頃からこころはあるといってもよいのかもしれない。ここまで厳密に考える必要性はないが、我々は幼い子どもを前にした時、自然と子どものこころについて考えながらやりとりをしているだろう。子どもが指さしや単語で何かを伝えてくるようになる遥か前の月齢から、わずかな表情や視線の変化、声などから子どもの“こころのよ

うなもの”を汲み取り、ああでもないこうでもないと関わろうとする。養育者が子どもの行動の背景にあるところについて目を向けてしまう傾向であり、“子どものところを持ったひとりの人間とみなす傾向”を、心理―志向性（マインドマインデッドネス：Mind-Mindedness）と呼び、大人の感性の中核をなす重要な親機能の1つであると考えられるようになってきている（Meins, 1997）。

心理―志向性は比較的幼い子どもに対する親機能という特徴があるが、これに限らず、子どものところの動きに目を向けて、子どもの行動を行為レベルではなく、その背後にある感情や思考といった動機について考えながら理解しようとする傾向など、様々な同様の親機能が注目を集めつつある。それらのことから、子どものところからだの発達を支える親機能の中核は、“子どもの視点から物事を見る能力”（see things from the child's point of view）であると考えられるようになってきている（篠原, 2014）。前の節で愛情の話があったが、子どもが大人から愛情を実感する瞬間というものは、大人のふるまいから、自分の立場に立って考えてくれているということを実感するその瞬間なのかもしれない。ただし素朴である意味では当たり前な親機能ではあるが、子どもの視点に立って考えるという姿勢は、忙しい日々の中や、自分自身の心に余裕がない時には非常に難しいものであるということも忘れてはならないだろう。

3. 関係性とところの育ちを含めた療育

問いかけ：発達に凸凹を抱える子どもたちは、どうなれば幸せになると思いますか？

この問いかけに関しても、子どもの抱える困難さの程度や、子どもや親の年齢、周りの環境、そして親の抱える子育て観や人生観の影響を受けつつ様々な回答がなされるだろう。

感覚運動指導教室に以前訪れた家族の中でも様々な願いがあり、「縄跳びが跳べるようになれば…」、「絵カードで会話ができるようになれば…」、「言葉が増えれば…」と、それぞれの家庭が抱える切実な願いがそこにはあった。確かに、我が子と同年代の子どもが何気なくしている行動の一つひとつが我が子にはできず「～ができない」ということばかりが目にとまったり、時に「〇歳くらいの遅れがあります」と指摘されたりする家族にとっては、子どもの能力の成長は本当に大きな要因であろう。実際に、幼い子どもがそれまでできなかったことができるようになる時、その親の喜びはそれまでの疲れを吹き飛ばすとびきりの報酬であろうし、日常の何気ない動作一つひとつに介助をする労力は計り知れないものであることを考えれば、様々な訓練によってそうした行動に成長が見られることは、家族の生活そのものを変える大きな変化となりうるだろう。

“療育活動”とは、様々な障害（がい）や発達上の困難さを抱える子どもたちに対して、医療的なサポートと並行して、身

辺自立や身体活動、コミュニケーションなどの支援を行い、「医療」と「教育」の両面から、子どもの力を伸ばしていくような教育的対応を指すとされる。そして上述した家族の願いと、この療育活動という枠組みとが組み合わされた時、特別な訓練を通して、様々な能力の発達を促したり、新しい行動の獲得やいわゆる“問題行動”の減少、障害特性の改善といったことが期待されるのは当然の流れなのかもしれない。そして子どもの行動や能力に何らかの変化が生じた時に家族に生じる変化（報酬）の大きさは、すでに述べたとおりである。

ただし、訓練によって少しでも“健常児”と呼ばれる子どもに近づけた分だけ、我が子が幸せになれるのではないかという想いは、時に危険なものであるということが指摘されている（小林・鯨岡, 2005）。この想いは子どもを抱える養育者にとって、また子どもたちと関わる様々な立場の大人たちにとって、当たり前の親心であったり、子どもの将来を願う想いとして素朴に生じてくるものであり、否定されるべきものではないだろう。だが、そうした子どものために想っての思いが子どものところを離れて独り歩きを始めた時、気づけば子どもの発達を支える関係性の大切な要素を、すなわち“子どもの視点から物事を見る能力”という大人側の機能を失うことになりかねない。

このように考えた時、発達に困難さを抱えた子どもたちの為に求められる療育活動とは、能力の発達や障害の改善を促すということだけではなく、発達の困難さを抱えながら生きている子どもの視点に立って考え、周囲との関係性の支援や、環境の調整などによって、障害があっても子ども一人ひとりが、そして彼らを取り巻く身近な他者（親や関係者など）とが、充実した生活を送ることができるようにするための総合的な支援であるといえるだろう。

第2章：“プライム PRIME”とは

ここからは、第1章で提示した“子どもの視点に立つ”という視点を軸とした支援を、5つのキーワードを基にもう少し具体的に提示できるよう試みる。なおここでは5つのキーワードの頭文字をつなげて“PRIME”と呼称する。

前倒しになってしまうが、5つをつなげると“Play therapy for Relationship development focused on Inter-subjectivity, Mentalization and Empathy”となり、「相互主体性・メンタライゼーション・共感性に焦点をあてた関係発達のためのプレイセラピー」を意味する。いずれも子どものところの動きに寄り添い、それを土台にして行う支援に関するキーワードである。

第1章に述べた通り、近年の発達心理学や発達精神病理学の研究において、人間のところの形成や成長、そして様々な発達には、“そこに確かにところがあると信じて関わってくれる”大人の存在が決定的に重要だと考えられている。それは“赤ちゃんの意図や感情を読み取って応じようと努力してくれる親の姿”

であったり、“様々な症状や行動にその人のこころの動きを読み取り言葉にして返していくセラピスト（支援者）の姿”に通ずるものだといえる。こうした大人側“あり方”は、人間の成長にとって人生の最も初めの頃から用いられていて、同時に、ある意味で一生に渡って大切となるものである。PRIME という英語そのものは、「最も大切な」という意味や、「最初の」といった意味を持つ単語を有しており、そんな“あり方”を軸にした支援活動を行いたいという願いもあって、これらのキーワードを用いた次第である。

1. P : Play therapy プレイセラピー

問いかけ：他の人よりも感情のコントロールや身体のコントロールが難しく、思うように遊ぶことができないまま何年も過ごしてきたとしたら、どういった体験や感情を経験できてきたのでしょうか？反対に、どういったことを経験できずにきたのでしょうか？

プレイセラピー（遊戯療法）とは、原則として子どもを対象として、遊びを主なコミュニケーション手段として行われる心理療法の1つである。こころに傷を抱えていたり、強い不安があるなどして、心身のバランスを崩した子どもたちに対して、言葉だけでなく、“遊び”というコミュニケーションや表現を通して、その子どものこころの動きを理解し、伝え返すというやりとりを通して、子どもの自己治癒力による回復や発達課題のやり直しを行う支援である。

子どもたちは、遊びから汲み取ったこころの動きをセラピストが鏡のように映し返してもらうことで、自分自身のこころの中の世界の整理や、現実との折り合いの作業を行うことになると考えられている。その際セラピストは、子どもの不安や苦しみを目の当たりにして、親代わりの振る舞いをとる代わりに、それらの情動をそのまま受け止め、理解し、できれば子どもに役立てる言葉で返していくことが必要であると考えられている（Bick, 訳書 2000）。すなわち、直接的にケアするのではなく、こころの動きを言葉で描写し、子ども自身がこころの動きに気づけるようにすることがセラピストの役割であると考えられている。そうすることで、子どもが自分のこころに生じる様々な感情を自分で抱え、考える（悩める）ようになることができるのである。

ただし、一般的なプレイセラピーでは、子どもに自分のこころの世界を言葉や遊びを通して表現する力（象徴機能）があることや、他者との関係性を形成しそれを活用する力（対人的な力）があることを前提としている。しかし発達に困難を抱える子どもの場合、それらの機能自体に難しさを抱えており、従来のそうした機能を前提とした方法では不十分であることが指摘されている（滝川, 2004 など）。例えば、子どもの自発的な動きにただ寄り添うだけでは、子どもがただ一人遊びに没頭し

てしまっところの動きや交流が生じないことがある。また、自ら遊びやこころの表現を生み出すことが困難であると考えられる。

だが、だからといって遊びを介した支援が有益ではないというわけではなく、セラピーという特殊な場面に限らず、日常生活を含めて、こうしたコミュニケーションや対人的な力の土台となる機能に困難を抱えているということは、子どもたちのこころとからだの発達を妨げている大きな要因となっており、遊びを介した支援の必要性はより高いものであるといえる。

こうした考えの下で、“従来のセラピーが前提としていた力や機能そのものを発達させるような関係性を形成すること”が大きな目標としたプレイセラピーの実践とその効果が報告されるようになってきている。発達に困難を抱える、特に自閉スペクトラム症児の特性に応じた新しい方法論の模索としては、二者関係の構築や情動の共有を中心課題にすること（神野, 1995）、子どもの意欲や関心に寄り添いつつも、セラピストのより主体的な関わりを持って遊びを援助する姿勢（古市, 2008 ; 石井, 1995 など）、象徴的解釈ではなく、体験自体を理解し、記述・共有すること（Alvarez, 2010）、発達の視点から意味を読み取り、そこで起きている現実的な体験を推し量り、セラピストが追体験する（共有）ことに重きを置くこと（滝川, 2004）、などの技法的な修正を行うことで、子どもたちのこころとからだの発達に寄与することが可能だということが明らかとなってきた。

こうした発達に困難を抱える子どもたち、中でも自閉傾向を有する子どもたちへのプレイセラピーにおけるセラピストの在り方は、大きく分けて2つの観点からなるといえよう。

①セラピスト自身の主体性を介した情緒的な交流による関係性の構築

②前象徴水準・現実水準（体の感覚や今ここで生じている感情や意図のレベル）での体験の共感と理解、共有

このような、ある意味で乳児とその養育者の早期のコミュニケーションに近い関わり方を通して、こころの（傷の）回復だけではなく、こころの成長を促す支援が、発達に困難を抱える子どもたちに対する今日のプレイセラピーの1つの方向性である。

2. R : Relationship development 関係発達

問いかけ：他の人の意図を理解しづらく、自分の意図も伝えづらい状態の中でずっと過ごしてきたのだとしたら、人に対して期待感や安心感を持てるのだろうか？一緒に何かをする楽しさを知っているのでしょうか？頼り方を知っているのでしょうか？

では、“自分のこころの世界を言葉や遊びを通して表現する力（象徴機能）や、他者との関係性を形成しそれを活用する力（対

人的な力) そのものを発達させるような関係性” というものはどういったものだろうか。

子どもの発達を、子ども個人やその能力・行動という観点だけではなく、子どもを取り巻く周囲の人々との関係という観点から捉えるという視点は関係発達論(鯨岡, 1999a/b)と呼ばれている。

今日では様々な育児書や障碍に関する書籍が身近にあり、「〇歳になると～ができるようになる」といった発達の里程碑や、「〇〇障害の子どもは～という障害特性を持つ」といった障碍に関する医学的な診断を受ける際の診断基準となる行動に関する知識を多くの人たちが有するようになってきている。それはあたかも、子どもが時とともに、もしくは障碍なるものを持って生まれると自動的に、特定の行動を示すようになるというイメージを我々に喚起させるものであるが、関係発達論では、子どもの現在の姿は、子どもがもって生まれた遺伝的な要因だけの結果ではなく、またこれまでの環境や経験だけの結果でもなく、関係性の歴史の積み重ねの中で、周囲との相互作用を経て少しずつ作られてきたものであると捉える。

すなわち、一人の子どもの発達の傍には、養育者をはじめとした“育てる者”の存在があり、その他にもきょうだいや友達など“共に育つ者”の存在があり、子どもは他者との関係性の中で育つ存在であると考えられている。また、そうした者たち自身もまたそれぞれの人生を育ちゆく者であり、互いに影響を与え合いながら共に育ちゆく存在であるといえるだろう。このように一人の子どもが他者との関係性の中で発達する様子や、子どもの発達が生じる場である関係性そのものの変容を指して、関係発達という。

このように子どもの発達が他者との関係性の中で生じるものだと捉える時、従来子ども個人が抱えるとされていた障碍もまた、子どもの中にだけあるのではなく、子どもを取り巻く関係性そのものの中にあると捉えることが可能となる(小林・鯨岡, 2005)。

上述の問いのように、子どもに何らかの障碍がある時、子どもを取り巻く関係性において、様々な困難が生じることとなる。その結果、身近な他者との心地よいポジティブな体験を得られにくく、反対に怖かったり嫌だったといったネガティブな体験が増えていくこととなる。そしてそれらが積み重なっていくことにより、他者とのポジティブな関係性の中で形成される自信や安全感、安心感といった、信頼関係や自己肯定感が育ちにくくなる。安心できず、怖く、イライラするということが何年も続く中で、子どもはますます過敏になり、コミュニケーションの意欲を失うこともある。すなわち、元々あった障碍特性、障碍の種のようなものが膨らんでいくこととなる。すると興味や拡大や、様々な人や物事との関わりや挑戦といった、外界への進出という発達にとってプラスとなるチャンスが得にく

いという悪循環に陥ってしまうリスクが膨らむこととなる。

そしてポジティブな経験が不足し、ネガティブな経験が増えるという悪循環が何ヶ月、何年と積み重なっていく中で、様々な発達のチャンスが得られず、不安や自信の無さばかりが増えていけば、自信の無さや不安、苛立ちなどは、結果としていわゆる“問題行動”となって現れ、診断基準にあるような行動へと繋がっていくのである(図1参照)。

また、関係性のもう一方の構成員である関わり手の側も、ある種の育てにくさを持つ子どもを前に、苛立ちや不安、自信の無さ、寂しさ、心配、悲しみ、疲れなど様々な思いに晒されることが多い。そうした思いは、関係性の中で子どもへと跳ね返り、子どもまでもイライラそわそわしたり、怒ったり悲しくなったりと、こころの動きや行動として影響を受け、またいわゆる“問題行動”になったり、障碍特性が強まったりすることへとつながっていく。このような意味で、障碍というものは、その子個人の中にあるのではなく、その子を取り巻く対人関係全体の中、その子とその子を取り巻く関係性の間に生じるものだといえるのである(小林・鯨岡, 2005)。

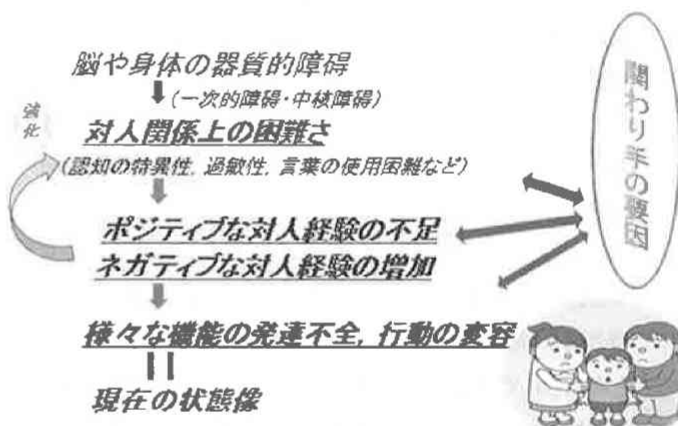


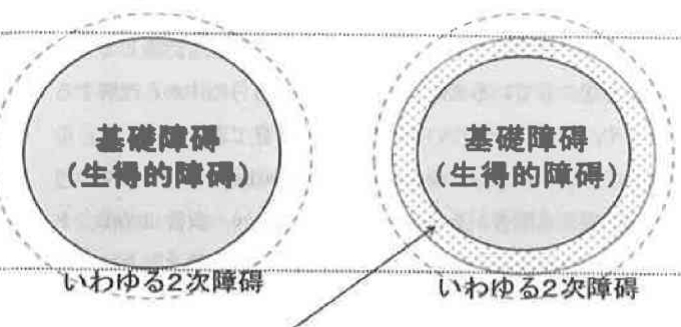
図1 関係障碍という障碍観

このように一人の障碍のある子どもの示す、一見したところ否定的な姿や行動、障碍特性や能力の未獲得には、こうして誕生後の長い生活において、様々な対人関係の積み重ねの中で形作られた面があると考えられており、これを“関係障碍(relationship disturbance)”と呼ぶ(小林・鯨岡, 2005)。特に対人関係の障碍が障碍特性の中核であると言われる自閉傾向を有する子どもには、この関係障碍の部分を大きく有していると考えられている。

これは障碍というものがいかに複雑で対処困難なものであるかということを示すものであるが、同時に、子どもたちの中にあるとされていた障碍や障碍特性について、そのすべてとは言わないまでも、その一部に対して、予防や改善、成長の可能性があるという一つの希望であるともいえるだろう(図2参照)。

このように発達に困難さを抱える子どもたち、なかでも自閉

傾向を有する子どもたちの発達を他者との関係性という視点から捉え直し、支援するという動きが近年盛んになってきている。その中で、愛着対象の成立や特定の相手との共感関係の成立が、自閉症児の障害特性の軽減や多機能の発達を促すことが報告され始めた(別府, 1994; 高橋・伊藤, 2006; 古市, 2008 など)。



“関係障害”(relationship disturbance)

(対人関係)の障害を持つがゆえに、周囲との関係の中で、二次的、付加的に形成されてきた症状・障害特性(小林・鯨岡, 2005)

図2 関係障害と二次障害の関係

加えて、自閉症児は外界との交流に発展しない“道具的安全基地(伊藤, 1994)”という特異な愛着関係を養育者との間に形成することがあるが、愛着対象が外界との相互作用を支える“心理的安全基地”へと質的に変化するには、養育者以外の他者が特定の他者として関係を発達させることが必要であるということも明らかとなってきている(別府, 1994)。

すなわち、自閉症児と他者との関係発達、特に支援者など養育者以外の特定の他者との関係発達は、

- ①自閉症児個人のこころとからだの発達を促す可能性がある
 - ②自閉症児と養育者との関係性を質的に良好なものへと変容させる可能性がある
- ということが期待されるのである。

3. I : Inter-subjectivity 相互主体性・間主観性

問いかけ：言葉が拙い幼い子どもとのやりとりでは子どもの発する声や単語に意味を付与して補いながら私たちはコミュニケーションを行うが、コミュニケーションに困難さを抱える幼児期以降の自閉症児の言動に対して、同じように私たちは意味を付与してコミュニケーションを行えているでしょうか？

では、他者と関係性を築くことに困難さを抱える子どもたちと一体どのように関係を発達させていくことができるのだろうか。また、どのようにしてコミュニケーションに困難さを抱える子どもたちの意図を汲みとり、やりとりを紡いでいくことができるのだろうか。

この困難な課題に関しては、関係発達論の中で重要視される“Inter-subjectivity”という概念が持つ2つの意味が有益であると考えられる。この単語には様々な日本語訳が当てられ、そ

れぞれに異なる意味が付与されているのだが、ここでは鯨岡(2006)が述べている訳のうちの二つである“相互主体性”と“間主観性”とに注目したい。

相互主体性とは、自身が一人の主体として生きつつも、相手を一人の主体として受け入れるという主体の在り方を指す概念である。一人の人間(主体)は、自分の思う通りに振る舞いたいという願い(自己充実欲求)を持ちつつも、同時に誰かと一緒に居たいという願い(繋合希求性)を併せ持つ存在であると考えられている。この時に相反する欲求を有しながらも、そのどちらか一方に振り切るのではなく、そのバランスは様々であるが、そのどちらも抱えながら他者との関係性を形成・維持・発達させるあり方を指す概念が相互主体性という言葉に含まれる意味であると考えられる。

自分の思いを押し出しつつも、相手の思いを受けとめるという関係性はいつでもできるというわけではなく、またそのバランスも一定ではない。例えば、幼い子どもと養育者との関係性のように、一方(子ども)に大きく主体性を譲る形で他方(養育者)が関わる状態もあれば、より成長した子どもと養育者との関係性のように、一方(子ども)の主体性を尊重しつつも、他方(養育者)の主体性を先程よりもより強く前に押し出すような状態もある。この互いの主体性のバランスの在り方の変化も、関係発達の内実を読み取る一つの切り口であろう。

また、発達に困難さを抱える子どもとの関係発達の難しさをこの相互主体性という概念から見た時、子ども自身のコミュニケーションの困難さ、様々な感覚の過敏さ、反応の乏しさ、成長のスピードのアンバランスさ、子どもの意図をわかってあげることの難しさ等、多様な要因によって、相互主体的な関係性を発達することが困難になっていると言い換えることができる。

小林・鯨岡(2005)によると、自閉傾向のある子どもとの関係発達の過程においては、大人は子どもの微かな気持ちや興味の動きを受けとめて、それに応じることが定型発達と呼ばれる子どもとの関係性よりもより長く、かつ子どもの特性に合わせた形で必要となる。より具体的には、子どもに合わせる関わり(関わり手側の主体性を大きく譲る形で子どもの主体性を尊重すること)を中心に行い、関わり手の振る舞いが子どもにとって脅威的に映らず、関わり手が子どもにとって親しみのある接触欲求の対象となってから、関わり手の思いや考えを少しずつ押し出していくようにするという流れが必要となる。

では、どうやってこうした関係性を持ちにくい子どもの気持ちを理解し、受け取ることができるのだろうか。ここで、Inter-subjectivity のもう一つの訳である“間主観性”という概念が重要になってくる。

間主観性とは、相互主体的な関係性の中で、相手の情動(体の感覚に近い感情や意思)がこちらに伝わってくることをさす概念である(鯨岡, 2006)。端的な例としては、生後数か月の

早期母子関係において赤ちゃんと母親が、言葉や身振りといった象徴的コミュニケーションを介さずに、声のトーンや動き、雰囲気などだけでコミュニケーションをとっている現象を支えるものである。

こうした原始的なコミュニケーションは、我々が普段意識して行っている言葉や身振りを介した象徴的コミュニケーションがテレビやラジオの電波のやりとりに例えられるのに対して、2つの音叉が共振するようにして響きあう状態に例えられる。小林はこうしたコミュニケーションの水準を、情動的コミュニケーションと呼び、発達に困難さを抱える子どもたちとのやりとりにおける重要な1つのチャンネルであると指摘している(小林, 2000)。また、象徴的コミュニケーションのチャンネルでのやりとりに慣れ親しむ我々大人は、子どもが情動的コミュニケーションを行っていることに気づくことができずに、コミュニケーションが困難な子どもであると判断してしまう危険性も同時に指摘されている。また、上記の問いのように、特に子どもの年齢が高くなったり、子どもが使える言葉が増えてくるのに合わせて、我々が子どもの言葉を字義通りに受け取ってしまいがちであるということは留意すべき点であろう。

相互主体的な関係性の中で、コミュニケーションの水準のすれ違いに注意を払いつつ、子どもの発達状況、障碍特性、感覚特性といった背景も意識しながら、子どもの視点に立とうと没頭することで、ふっと子どもから意図や気持ちの種のようなものが伝わってくることもある。この関わり手の中に生じた感覚を最大限に意識して、ある意味で一人二役的になりながら“やりとり”を作っていくことが、発達に困難さを抱える子どもとの関係発達、相互主体的な関係性を支えるコミュニケーションの土台となる。

すでに、発達に困難さを抱える子どもたちへのプレイセラピーにおけるセラピストの在り方として、セラピスト自身の主体性を介した情緒的な交流による関係性の構築、前象徴水準・現実水準(体の感覚や今ここで生じている感情や意図のレベル)での体験の共感と理解、共有の重要性について触れたが、それらはここでいう、相互主体的な関係性と間主観的なコミュニケーションの重要性という言葉に換言可能なものといえるだろう。

4. M : Mentalization メンタライゼーション

問いかけ：相手のところについて意識するということを、私たちはどのようにして学んできたのでしょうか？

相互主体的な関係性において生じる間主観的なコミュニケーションは、大人側と子ども側の双方の動きからなるものだが、大人側の動きだけを切り取れば、第1章で紹介した、養育者が子どもの行動の背景にあるところについて目を向けてしまうという、“子どもをこころを持ったひとりの人間とみなす傾向”であ

る心理志向性(マインドマインデッドネス: Mind-Mindedness)(Meins, 1997)や、それらと近接する概念を包括した“子どもの視点から物事を見る能力”(篠原, 2014)と深く関わってくるものだということが見て取れるだろう。

これに関連して、近年、大人が子どもの視点に立つという限定したものではなく、より広く、「人の行動の背景にある意図的なこころの状態について、想像的な能力を使って認識してその行動を起こしている人に対処し、他者を自分の中から理解することや、逆に自分について他者の目から見て理解すること」を指してメンタライゼーション(Mentalization)という言葉で包括的に捉える動きがある(Bateman & Fonagy, 訳書 2008)。すなわちそれは、自分や相手の言動を“こころの動き”という視点から理解することである。また、メンタライゼーションは2つの側面からなり、他者の意図や感情を理解する“対他者的メンタライジング”と、自分自身の感情の動きに気づく“対自的メンタライジング”とが絡み合うものだと考えられている。これまで議論してきた間主観性や子どもの視点に立つ能力は、この前者の対他者的メンタライジングに関するものであるといえるだろう。加えて、「心の理論」の獲得の困難さに代表される、自閉傾向のある子どもたちの対人的な困難さの一側面もまた、対他者的メンタライジングの困難さとして捉えられるようになってきている。さらには、発達に困難さを抱える子どもたちが自分自身の感情を言葉にして表現したり、感情をコントロールしたりすることができず、パニックや行動化によって溢れさせてしまう姿は、対自的メンタライジングの困難さとして捉えることも可能である。

では子どものこころとからだの発達に重要だとされるこのメンタライジングの力、特に対他者的メンタライジングの力を、人はどのように獲得し、発揮することができるのだろうか。この力の発達は、「良心的かつ内省的で、十分に調律的であるような、より成熟した心を持つ者との相互作用に決定的に依存している(Fonagy & Target, 2003)」と考えられている。すなわち、メンタライジングの力は、他者からメンタライズされる体験によって育まれる力なのである。加えて、“遊び心”のある関係性もまた欠かせないと指摘されており、遊ぶことが遊び心のある関係性の必要十分条件ではないが、遊びを介したやりとりの中でメンタライズするということの有効性を示唆するものであると言える。

また、子どものメンタライジングの力を育む大人自身は、どのようにして対他者的メンタライジングの力を維持することができるのか。

1つは子どもと同じく、身近な他者にメンタライズされることによって支えられている。密室育児で子育てに行き詰った養育者が、子育てについての相談を誰かとして気持ちをくんでもらえた後(メンタライズされる体験の後)、子どもとのやりとり

が少しだけしやすくなるのは対他的メンタライジングの力が回復した結果だと捉えることができるだろう。

もう一つは、対自的メンタライジングの力が発揮されることにある。大人が自分自身の中にある喜びや悲しみ、不安や焦り、寂しさ等、こころの動きに自覚的であること、すなわち内省的であることが欠かせないものであると考えられている。

このように発達に困難さを抱える子どもたちに対して、関わり手である大人が、自分自身のこころの動きに自覚的でありながら、子どものこころの動きに目を向けるという姿勢が、子どもの中に、自分自身や他者のこころの動きを理解するという、社会的なコミュニケーションの土台であり、特に自閉傾向のある子どもたちの中核的な困難さでもある力の発達を支える手段となりうるのである。

もちろん発達に困難さを抱える子どもたちの社会性の障碍は、一次的には脳の機能障害に由来するものであり、彼らが生得的にこのメンタライジングの力の発達に困難さを抱えていることは事実であろう。しかし、器質的な障碍の存在だけでなく、生得的な感覚特性や認知特性などによる互いの知覚のズレなどにより、周囲の他者が彼らのこころを正確に理解することが困難であるということが、自閉傾向のある子どもたちのメンタライジングの力の発達を阻害している可能性も指摘されており（別府，2014）、彼らのメンタライジングの力の困難さにおける“関係障碍”の部分の予防と改善はその他の障碍特性同様、検討の余地があるものだと考えられる。

加えて、子どものこころの動きを理解するためには、子どもとの関わり合いの中で関わり手が自分自身のこころの動きに自覚的であること、すなわち内省的であることが重要だという知見は、先述した間主観的なコミュニケーションに重要な示唆を与えてくれるものである。

すなわち、関わり手が子どもと関わる中でどれだけ子どものこころの感情や意図の種のようなもの強く確信したとしても、それは自分の誤解かもしれないという可能性を、頭のどこかで常に意識することも忘れてはならないということである。自発的なコミュニケーションが乏しい子どもや、言葉の使用に困難さを抱える子どもとの間では、間主観的に感じ取ったことに関する主観的な確信は関係性を構築する上で欠かすことができないが、それはどこまでいっても主観的なものであり、究極的にはそれが事実であるかどうかの判断は関わり手にはできないのである。そのため保育の現場においては、関わり手が感じ取ったことをもとにしてやりとりをする際に、“華麗なる誤解”という言葉が用いられることもあるようである（鯨岡・安来市公立保育所保育士会，2005）。このある種の謙虚さともいえる、批判的・内省的な視点を保持し続けることが、子どものこころのわずかな動きにも目を向け、また必ずしも常にぴったりと寄り添い続けることができない中でも子どもの反応からより正確に、

もしくは多様に子どものこころを考える上で欠かすことのできないものである。そしてこの姿勢を見失うとき、両者の関係性は、たやすく関わり手の主体性の押し付けとなり、子どもの主体性をないがしろにし、相互主体性が失われた状態へと変容してしまうだろう。

5. E: Empathy 共感（性）

問いかけ：理由も名前も対処法もわからない強い感情があなたを襲ったとしたら、どうなってしまうのでしょうか？
そんな自分ではよくわからない自分の中のモヤモヤや強い感情に、名前や理由を誰かが教えてくれたとしたら、どんな感じがするのでしょうか？

“共感（性）”とは、他者の感情をその人の身になって感じ取り、理解することである。より正確に言えば、他者を外側から眺めて判断するのではなく、相手の立場で感情を感じ、理解することであり、他者理解の本質であると考えられている。上述した間主観的な理解やメンタライゼーションもこの共感性と部分的に重複するものであり、ここでは発達に困難さを抱える、特に社会的なコミュニケーションや感情のコントロールに困難さを抱える子どもに共感的に接することの意義に焦点を当てて述べることにする。

共感的なやりとりが心のケアの基本となることは広く知られていることだが、自分の感情を自分自身で感じ、相手に伝えることが困難な人や、自分の感情に振り回されてしまう人とのカウンセリングの中では、相談者が自ら言葉にした感情に対して共感するだけでなく“情動調律（affect attunement）”的な関わりを行うということがある。情動調律とは、養育者と乳幼児とのやりとりのなかでみられる相互行動であり、母親が子どもの内的な状態や情動（言葉で表現できる感情よりも、より身体感覚的な感情を指す）を読み取り、子どもに対する刺激を調整するとともに、子どもの情動や注意の水準を調整し、その欲求を満たしつつ、子どもの不快を取り除くとともに、子どものネガティブな情動を調整するといった関わりを示す概念である（Stern，1985a/b）。

例を二つ挙げるとすると、例えば、おもちゃを手でもてあそびながら漠然とした関心や楽しさを感じている乳児に対して、母親が一緒に喜び、言語的にも非言語的にも楽しげな反応を返すことで、子どもに対して情動面での同調・共感している場面を思い浮かべてほしい。それまではまだまだ遊ぼうという明確な意図や、はっきりとした楽しさを持っていたわけではなかった子どもが、こうした働きかけによって、よりはっきりと楽しく遊びだそうとする姿に変わるといった場面を見たことがある人も少なくないだろう。これは母親側からの情動調律によって、乳児に無意識のうちに母親への情動的な同調を引き起こし、乳児側の情動を一層強め、明確化させる結果がもたらされたのだ

と考えられる。

また別の例を挙げると、泣いている乳児を母親が抱っこしながら、「よしよし」「大丈夫だよ」と、明るく元気にではなく、穏やかでしっとりとしたトーンで声をかけ、乳児の情動や息遣いに同調しているというやりとりがある。苦痛な情動を、否定せず、かつ動揺もせずに抱えてもらう働きかけによって、乳児の情動が幾分穏やかになり、乳児自らも指を吸ったり体を動かしたりして自分の情動をどうにか落ち着かせていく。

母親と子どもとの内的な共有体験が基盤になり、母親が乳児の意図や情動を自分の願う心的・情動的状态へ持っていき働きかけに対し、乳児も自分の情動的状态を母親の情動的状态と対応させて、両者の間で主観的でありながら一体感のある、共有された世界が出来上がっていく。こうした体験を通して、子どもは感情や意図など自己を育んでいくと共に、他者とのやりとり、感情や情動のコントロールを学んでいくこととなると考えられている。

実際に自閉傾向のある子どもへの親子合同のプレイセラピーの実践においては、子どもが安心して身をゆだねられるようなしっかりとした枠組みや態度を大人が示すことと、たやすく制御不能に陥ってしまう子どもの感情に寄り添い、その感情を否定することなく落ち着かせてあげる関わりの方が重要となることが指摘されている (Phyllis&Ann,2010)。

関係発達の視点から見れば、感情の起伏が激しかったり、パニックやこだわり行動といった激しい行動化によって感情を発露する子どもは、“感情を自分でコントロールすることが難しい”状態にあり、自身でもコントロールできない自分の感情や動きに困り、その不器用な SOS を周囲の他者に向けて発信している状態にあると捉えることができる。だとすれば、そうした状態にある子どもに対して、注意して制止をすることにあまり効果はなく、困っている子どもをさらに追い詰めるだけとなるということも容易に想定できるだろう。(加えて言えば、そうした子どもの感情に寄り添うことが困難なくらいに、周囲の他者も同様に困っており、注意や制止は大人自身の SOS のサインなのかもしれない。)

そのため、まずは子どもの感情や情動に寄り添い、情動調律的な関わりによって一緒に落ち着かせる体験(共制御)を積み重ね、少しずつ子どもが自分で落ち着く(制御)ことができるようになる関わりを提供していくことが、関わり手に求められることだと考えられる。これが発達に困難を抱える子どもに必要な共感の在り方となるのではないだろうか。

第3章：感覚統合療法と PRIME

最後に、これまで述べてきた PRIME の視点が、感覚統合療法を基にした運動療育とどのようにコラボレートしうのかについて検討する。両者の知見は2つの点で発達に困難を抱え

る子どもの発達に寄与することが可能であると筆者は考えている。

1 つ目の可能性は、感覚面や身体・運動面の困難さや特異さを持つ子どもたちのこころの理解、ひいては子どもたちの関係障害の予防・改善に、感覚統合療法の持つ感覚や運動に関する子ども理解の視点が活用できるということである。

問いかけ：からだのコントロールが難しく、大きく早くびよん
びよんとしか動かせないからだで生きるとしたら、
はたまたぐらぐらと不安定な感じがするからだで生きるとしたら、この世界はどのように体験されるでしょうか？

問いかけ：そうした特徴を持って生きているのに、そんな大変さに気づいてもらえないとしたらどんな気持ちになるのでしょうか？そんな特徴を抱えつつ生きていくために自分なりに考えた努力や対応策を、“問題行動”だと言われて怒られたり、禁止された時にはどんな気持ちになるのでしょうか？

明確な身体の障害を伴わないにも関わらず、協調運動が必要とされる行為に、年齢や知的水準から予想される以上の困難さを示す状態を「発達性協調運動障害 (Developmental Coordination Disorder)」と呼ぶ。これまでは国際的な診断基準の一つである DSM-IV-TR (2000) において、この障害は広汎性発達障害の診断との併存ができないという定義上の制約があった。それゆえ発達障害のある子どもの運動面での不器用さや困難さ、およびそれによる心理的影響について数々の指摘はあるものの、社会的にも学術的にも十分な理解がなされていないという状況があった。しかしこのたびの DSM-V (2013) への改定により、両者の診断の併存が可能となり、発達障害のある子どもの運動面の困難さが改めて注目を集めるようになってきている。

関係障害の話とも繋がるが、様々な感覚の過敏さや鈍さ、特異さを抱え、自分の身体さえ自分で思うようにコントロールすることができない、楽しく遊ぶこと自体が難しいという状態で生きることが、子どもの発達にどれほどネガティブな影響を与えているのかは想像もできないほどだろう。こうした気づきを受け、近年は発達上の困難を抱える子どもたちの支援においても、運動活動を通じた理解や、運動活動を介した援助の重要性はますます高まりつつある。

そして今日でいう発達性協調運動障害があるとされる子どもの示す特徴の多くは、これまで感覚統合療法が対象としていた子どもの特徴と重複する。それゆえ、感覚統合療法の中で用いられてきた、重力不安、低緊張、低反応、運動企画の困難さなどの知見が、子どもたちがなぜ日常生活の中でうまく遊ぶことが難しいのか、我々が何気なくしている動作において困難を抱えることになるのかという、子どもの抱える様々な困り感に

寄り添うための視座となりうるだろう。

2 つ目の可能性は、感覚遊具を介した活動や感覚運動が子どもの情動を喚起させやすいという特徴を持つため、その喚起された情動を間主観的に理解し、共感的に受け止めることで社会的なコミュニケーションが成立し、言語発達や関係発達の契機となりうることである。

問いかけ：赤ちゃんはどういった遊びの中で顔を上気させ、声をしきりに出しているのでしょうか？また、赤ちゃんの発する声は、どのような関わりの中で言葉へとなっているのでしょうか？

全身を使って、様々な感覚を体験しながら活動ができるという感覚運動あそびにおいて、子どもたちは身体感覚に加え、様々な感情体験をすることとなる。Wallon (訳書 1965) によると、情動の生起は呼吸の変化を生じさせる。そして横隔膜から唇に至る呼吸腔が、その壁膜を呼吸に押し付けて叫び声(発声行動)を生じさせるが、それが様々に調整されて言語用の音声形成するようになる。したがって情動の生起が起因となって自発的な、より正確には自然発生的な発声行動をもたらすという関係性が考えられる。

言語発達に困難を抱える自閉症の子どもたちとの感覚運動あそびを介したプレイセラピー場面のビデオ分析の結果、少数事例研究ではあるが、情動表出と自発的発声行動との間に正の相関関係が見られ、介入を重ねるごとに両者が増加するという傾向が確認されている(榊原, 2015)。これは情動と発声行動の関連についての Wallon の示唆が、自閉症児においても同様に支持されることを裏付ける結果といえる。

また、同研究において、自発的発声行動に加えて、模倣的発声行動、自発的発話行動、自発的身振りの増加が同時に確認されており、発声行動の増加にとどまらず、象徴的コミュニケーションそのものの発達に繋がりがうることが示唆されている。乳児の言語発達に関して、情動の生起や生理的状态の変化によって半ば「自然発生的に生起した発声行動」に対し、メッセージを読み取ろう、コミュニケーションの意図を読み取ろうとする他者が傍にすることで、子どもにコミュニケーションの力や指向性が育つ(麻生, 1992)とされ、様々な言語行為や象徴機能の基盤を形成するという考えがある。榊原 (2015) の介入研究では、セラピストが間主観的な理解や情動的コミュニケーションといった前言語的で原初的なコミュニケーションの水準でやりとり留意していることや、セラピストがリードする形で遊びを共有しようとする場面の割合が一貫して高いという関わり手側の特徴がある。そのため、子どもの情動表出の変動に伴って生じた発声行動に、意図を読み取ろうとするセラピストという他者の存在と在り方が作用した結果、無意識的で自然発生的な発声行動が、意識的で随意的な発声行動(コミュニケーションとしての発声行動)、ひいては発話や身振りなど、象徴的コミ

ュニケーション行動へと展開していったという可能性が示唆されている。

このような研究の知見からも、療育場面において、感覚運動によって活性化された子ども情動に対し、関わり手が間主観的な理解を働かせ、その意味をメンタライズし、やりとりを紡いでいくという関わりを行うことは、自閉傾向の子どもたちが困難を抱えているとされる発達早期の言語発達やコミュニケーションの発達過程の歩み直しを支援することに寄与するものであると考えられる。

引用

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S. (1978). Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Alvarez, A. (2010). Levels of analytic work and levels of pathology: The work of calibration. International journal of Psychoanalysis. 91(4), p859-878.
- 麻生 武 (1992). 身ぶりからことばへ——赤ちゃんにみる私たちの起源. 新曜社.
- Bateman, A. & Fonagy, P. (2004). メンタライゼーションと境界パーソナリティ障害——MBT が拓く精神分析的治療法の新たな展開. 狩野力八郎・白波瀬丈一郎 (監訳). 岩崎学術出版社. 2008.
- 別府 哲 (1994). 話し言葉を持たない自閉性障害幼児における特定の相手の形成の発達. 教育心理学研究. 42, p156-166.
- 別府 哲 (2014). 自閉症スペクトラムの機能連関, 発達連関による理解と支援——他者の心の理論に焦点をあてて. 障害者問題研究. 42(2), p11-99.
- Bick, E. (1962). 今日の子どもの分析. 日下喜古 (訳). 松木邦裕 (監訳). メラニー・クライン トゥデイ③. 岩崎学術出版, 2000.
- Fonagy, P. & Target, M. (2003). 発達精神病理学からみた精神分析理論. 馬場禮子・青木紀久代 (監訳). 岩崎学術出版社, 2013.
- 古市真知子 (2008). 自閉症児の初期発達における「数字に対する強い関心」が持つ意味. 心理臨床学研究. 26(5), p592-602.
- 石井哲夫 (1995). 自閉症と受容的交流療法. 中央法規出版.
- 伊藤英夫 (1994). 自閉症児の対人関係の発達 (1) アタッチメントの発達. 東京学芸大学特殊教育研究施設報告. 43, p57-65.
- 神野秀雄 (1995). 自閉症を疑う子どもの頻度(有病率)と乳幼児期における多様な発達過程. 治療教育学研究. 16, p1-12.
- 小林隆児 (2000). 自閉症の関係障害臨床——母と子のあいだを治療する. ミネルヴァ書房.
- 小林隆児・鯨岡峻 (2005). 自閉症の関係発達臨床. 日本評論社.

- 鯨岡 峻 (1999a). 関係発達論の構築——間主観的アプローチによる. ミネルヴァ書房.
- 鯨岡 峻 (1999b). 関係発達論の展開——初期「子ども—養育者」関係の発達の変容. ミネルヴァ書房.
- 鯨岡 峻 (2006). ひとがひとをわかるということ——間主観性と相互主体性. ミネルヴァ書房.
- 鯨岡 峻・安来市公立保育所保育士会 (2005). 障害児保育・30年—子どもたちと歩んだ安来市公立保育所の軌跡. ミネルヴァ書房.
- Meins,M.(1997). Security of attachment and the social development of cognition. East Sussex.UK: Psychology Press.
- Phyllis, B. B.・Ann, M, J. (2010).Theraplay Third Edition. Jossey-Bass.
- Pollak,S.D., Cicchetti,J.D. Hornung,K. & Reed,A.(2000)
Recognizing emotion in faces: developmental effect of child abuse and neglect. Developmental Psychology, 36.
p678-688.
- 榊原久直 (2015). 特定二者関係の発達における自閉症児の心理・発達の変容～関係発達と関係障害の観点から～. 大阪大学大学院人間科学研究科博士学位論文
- 篠原郁子 (2014). 心を紡ぐ心—親による乳児の心の想像と心を理解する子どもの発達. ナカニシヤ出版.
- Stern, D, N. (1985a). 乳児の対人世界——理論編. 小此木啓吾・丸太俊彦監訳, 神庭靖子・神庭重信 (訳). 岩崎学術出版社. 1989.
- Stern, D, N. (1985b). 乳児の対人世界——臨床編. 小此木啓吾・丸太俊彦 (監訳). 神庭靖子・神庭重信 (訳). 岩崎学術出版社. 1991.
- 高橋範子・伊藤良子 (2006). 学齢期自閉症児における対人的遊びの発達過程に関する検討. 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要. 2, p125-134.
- 滝川一廣 (2004). 自閉症児の遊戯療法入門. 治療教育学研究. 24, p21-43.
- 友田明美 (2011). いやされない傷——児童虐待と傷ついていく脳. 診断と治療社.
- Wallon,H.(1949). 児童における性格の起源. 久保田正人 (訳). 明治図書, 1965.
- WinnicotD.W.(1965). 情緒発達の精神分析理論——自我の芽生えと母なるもの. 牛島定信 (訳). 岩崎学術出版, 1977.